大激変！ 米コダック、アメリカン航空が破綻 NEC、任天堂は赤字転落

財界

ZAIKAI
a Japanese business biweekly

2012 2/21

平成24年2月21日発行（隔週火曜日）平成24年2月7日発売　昭和28年10月3日第三種郵便物認可　第60巻第5号

欧州危機、イラン問題での
日本の立ち位置は？
外交評論家 岡本行夫

◎インタビュー
一橋大学大学院教授
伊藤 邦雄
資生堂社長
末川 久幸
あいおいニッセイ同和
損害保険社長
鈴木 久仁

史上最高益企業もあれば赤字転落企業も出る時代――
環境大激変・混沌の中で、「本業の深掘りで進路を切りひらけ！」

本誌主幹 村田博文

表紙の人
リソー教育会長
岩佐実次
撮影 齊田 勤

東日本大震災を経た教育サービスの役割

岩佐 実次
いわさ・みつぐ
[リソー教育会長]

私たち日本人は今まで、命、安全は当たり前のものだと思っていたと思います。しかし、東日本大震災によって、それがタダではないということに気づき、日本の文化、価値観は大きく変わったのではないでしょうか。

それは子どもの教育、人生に関してもそうです。それはある意味での〝進歩〟なのではないかと思っています。私たち国民が命より大事なものはないということを知ったということは、私は「意識変革」が起きたと感じています。

被災地で起きたことは、決して他人事ではありません。我々としても、何か救済活動をしなければならないと考えて、まずは義援金を送ることから始めました。その後、社員たちが独自に募金活動を始めて、現在、第二弾、第三弾、第四弾、第五弾としてその活動を続けています。末永く継続していくことが大切だと考えています。

他にも、被災地で子ども達のためのサッカー教室を開いたり、早稲田大学と組んで移動理科実験教室を実施したりしました。

また、プロ野球観戦に宮城県の少年野球チームを東京ドームに招待し、子ども達にグラウンドに出てもらって始球式や選手への花束贈呈を行ってもらいました。

その生徒たちからの手紙が印象的です。「野球観戦に招待してもらっただけでも驚いたのに、憧れだった選手と間近で接する機会までもらって信じられません。自分達は多くの人に支えられ、助けられているということが、しみじみわかりました」という内容でした。嬉しかったですね。

誰かに助けられた子どもは、大きくなったら、また誰かを助けるでしょう。誰かに愛された人は、それをまた誰かに返すでしょう。この手紙をもらって、自分のやってきたことは間違っていなかったと思うことができました。

他にも、被災地出身の大学生30名に対して卒業支援奨学金（第二回目）を支給しています。

私も学生時代は学費で苦労をした経験があります。当時は学生運動が盛んな時代で授業もないことが多く、正直大学を中退しようかと何度も思いましたが、当時の大学総長の個人的支援で、無事に卒業をすることができたのです。

そのご恩をお返ししようと思っているうちに、その方は亡くなられてしまいました。そこで、将来を担う若者に奨学金を出すことで、恩返しをしようと考えたのです。

未曾有の被害をもたらした震災を経て、我々教育サービスの役割はますます重要になってきていると感じています。その中で、改めて私たちが行っている「個別指導」が子ども達の持つ個性を大切に引き出せる理想の指導だという思いを強くしています。

人は百人百様で、得意、不得意な部分は違っていますし、単なる「詰め込み教育の時代」は終わったと思っています。たしかに戦後、日本の教育はある意味では成功したと思いますが、一方では勉強についていけない生徒も多数生み出したというマイナスもあります。

これからの時代、知識の詰め込みと学力だけでは、世界で通用しません。世界で通用する人材を育てていかないと、日本の将来はありません。宗教や考え方、言語がバラバラな人たちとの連携、コミュニケーションを図ることができる人材でなければならないのです。

高い学力、知識に加えて「個性」を育てる教育が必要です。個性とは、まずは勉強以外のことで好きなこと、得意なことを何か見つけることですね。その機会を与えることができるのは、私たちの個別指導であると信じています。